まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第５３号（令和３年５月１５日）
読者数：６６２名（募集中）
ﾒｰﾙ：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
HP：https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

ポスト・コロナを目指して乗り越えていこう！

○新サッカー場外観
　優先交渉権者の提案イメージ

○復元した２代目平和の鐘

○基町プロジェクトより：基町資料室

○原爆文学作家 大田洋子

目　次

○巻頭言：広島からの平和発信―私の経験と想い
……ANT-Hiroshima 理事長　渡部朋子
○ひろしまのまちづくりの動き
　・新サッカー場建設の優先交渉権者決定
　・２代目平和の鐘、復元整備
○特別寄稿：トップのジャッジミスを問う―広島サッカー場の建設経緯を振り返る
……広島アイデアコンペ実行委員会　瀧口信二
○ほっとコーナー：自然学校から伝える……NPO 法人ひろしま自然学校　花村育海
○広島の復興の軌跡・人物編：原爆文学作家　大田洋子……編集委員　石丸紀興
○時代を語り建築を語る会報告：語り人　池田正彦（広島文学資料保存の会）
○Hihukusho ラジオ報告：ゲスト 平岡　敬（元広島市長）
○基町プロジェクトより：基町資料室……基町プロジェクトスタッフ　片島　蘭
○編集後記：精一杯頑張っている …… 編集委員　前岡智之

□ 巻頭言

広島からの平和発信—私の経験と想い

ANT-Hiroshima 理事長　渡部朋子

—広島に生まれながらヒロシマを知らない—

1953 年、私は被爆者の両親のもと、広島に生まれた。父母は原爆の体験を語ることはなく、ただ懸命に生き、私たち 5 人の子どもを育ててくれた。当時、原爆の傷痕はまだ街のあちこちに残っていたが、それは子どもだった私にとって日常的な風景で、そこに特別な意味を探すことはなかった。

転機は 20 歳の時だ。最愛の祖父を亡くしたことをきっかけに、私は、自分が生きている意味を深く模索することになった。そして生まれて初めて「広島に生まれ育った自分」を強く意識するに至った。決して被爆体験を語ることのなかった両親が、何を体験し、何を思い、どのようにして生き抜いたのか、私は初めて知りたいと思った。これが私の「ヒロシマ」との最初の出あいである。

大学生だった私は、「ヒロシマ」を知るため、多くの人を訪ね歩き、話を聴き、様々な集会に出かけ、本や資料を読んだ。4 年生の時にそれらを卒業論文にまとめたが、書き終えて分かったことは、「私はいまだ『ヒロシマ』を知らず、その一端に触れただけだ」ということだった。これから先、自分の人生を通して少しずつ「ヒロシマ」に近づいていくしかない。そう思い定めたのである。当時出会った方々—小倉馨さんや「あゆみグループ」を支えられた中野清一先生（いずれも故人）など—から受けた影響は大きく、その教えは今の私の活動の精神的な中核を成している。

—アジアの人々と共に—

結婚し、3 児の母となった私は、韓国の留学生との出会いを機縁に、現在の ANT-Hiroshima の前身である「アジアの友と手をつなぐ広島市民の会」を 1989 年に設立。留学生・就学生の支援活動や、国際交流の活動をスタートさせた。

1991 年の元広島市長・平岡敬氏の平和宣言は印象深かった。宣言は、かつての植民地支配や戦争によってアジア・太平洋地域の人々を苦しめたことに対する謝罪とともに、平和を脅かすあらゆる要因を取り除き、人々が安らかで豊かな生活のできる平和の実現のため、不断の努力を誓うものであった。私は突き動かされるように、1994 年のアジア大会終了後から活動を海外にも広げ、ネパール、パキスタン、フィリピンなどでプロジェクトを開始した。異文化、言語の壁、紛争、自然災害、資金難など、プロジェクトの推進には多くの困難があったが、現地の人々と共に、10 年、20 年と時間をかけて進めていった。「苦闘し、悲惨にあえぐ人々と共に働く」ことをモットーに各国に出かけ、共に泣き、笑い、かけがえのない友人ができた。フィリピン・ルソン島北部、第二次世界大戦の激戦地を、和解を求めて小さな車に乗って旅したこともある。「憎むべきは人ではなく戦争」と言って、私を抱擁してくれたフィリピンの山の民の優しさは生涯忘れないだろう。今日、これらの友人が毎年 8 月 6 日に自国で原爆展を開催し、平和をつくりだすために率先して行動してくれている。

—国境も固定概念も飛び越えて—

活動の広がりにあわせ、組織の名を ANT-Hiroshima に改称、法人格を取得。活動の対象となる場は海外へも広がったが、私たちの拠点はあくまでも広島であり、活動の根底にはいつもヒロシマの体験と記憶があった。

2015 年、世界核被害者フォーラムが広島で開催された。私は 2 年間の準備期間も含めて、実行委員としてフォーラム開催に尽力した。目の前に世界各地の核被害者が集い、当事者としての発言が次々と繰り広げられた。それが「グローバルヒバクシャ」との最初の出会いであり、彼らとの連帯の必要性を強く感じた。

同じ頃、核兵器の非人道性を焦点に、各国政府や ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）など NGO の働きに注目が集まり、核兵器禁止条約への動きが加速した。大胆かつ緻密に戦略を立て、インターネットや SNS を駆使して、多国籍で働く ICAN の若者たちの姿に、日本の若者も大きな刺激を受けて、これまでの平和運動のスタイルを越え、新たな広がりを作り始めている。ANT のインターンやボランティアの仲間たちも、Instagram や YouTube を使いながら、新しい発想で平和発信に取り組んでくれている。そんな中、ついに 2021 年 1 月 21 日、核兵器禁止条約は発効し、国際法となった。ANT も ICAN のパートナーとなり、協力しあってキャペンーンを展開している。

―これからの広島の役割―

これからの時代は、核の問題のみならず、今日の新型コロナウイルスのパンデミック、気候変動など、世界中が協力しあって問題の解決のために力を合わせなければならないと思う。国境をまたいだ多様な人々との連帯を生み出すために、広島は貢献できないだろうか。核の悲惨さや被爆の実相を、当事者の肉声で世界へ伝えてきた広島には、その経験が力として蓄えられているように思う。その力をもっと世界の問題解決のために役立てたい。例えば、広島の地に国際 NGO や国際機関などを誘致して、多国籍の志ある若者を招き入れることからスタートしてみてはどうだろう。

また、被爆者の声を受け継ぐ私たちは、被爆の実相を語り伝えるだけでなく、核兵器禁止条約をてこにして、実際に核をなくすための行動を起こしていかねばならない。その一方で、平和の意味を「非核」のみに限定して捉えることなく、「命と尊厳」を守るために活動する人々への共感と支援を大切に、連帯の輪を広げたい。

広島に生きるということ―その意味を私たち一人一人が、今一度考えよう。広島に生きる私は、世代も国境も越えた仲間と共に、これからも「核なき平和と公正な社会」を目指して力を尽くしていきたいと思う。

参考文献：「非戦・対話・NGO　国境を越え、世代を受け継ぐ私たちの歩み」新評論
大橋正明・谷山博史・宇井志緒利・金敬黙・中村絵乃・野川未央　編著
内田聖子・木口由香・小泉雅弘・田村雅文・満田夏花・渡部朋子　著

ひろしまのまちづくりの動き

① 新サッカー場建設の優先交渉権者決定！

優先交渉権者の提案イメージ

・プロポーザルの審査結果

広島市の有識者審議会は 3 月末に参加事業者 4 社による提案のプレゼンテーションを行い、審査の結果、大成建設などの共同企業体を優先交渉権者に決定。

南と東側に幹線道路が走り、北側に住宅団地があり、南北の幅が狭い敷地条件のなか、東側の広場から西側の川辺への回遊性や広場での日常的な賑わいづくりなど、求められる性能に対して 4 社とも創意工夫を凝らした提案がなされていた。

・優先交渉権者の提案内容

スタジアムの 4 隅を開放的にしてスタジアム内外の一体感を図っている。スタジアムと広場エリアをつなぐゾーンにイベント用の「スパイラル広場」や多機能施設の「サンフレタウン」、段々畑のように植栽した「緑のテラス」など賑わいを誘う仕掛けが豊富である。

スタジアム 2 階レベルに東西に走る 2 本の自由通路を設け、広場エリアから西側に抜ける市民の散策路とする。「街なかスタジアム」として 365 日賑わう仕掛け作りが高く評価。

・今後の課題など

都市公園法上の建蔽率 12%をこの広場では大幅に超過しているが、市の条例で緩和するという。中国庭園や大田洋子文学碑なども移転を余儀なくされるが、丁寧な対応が求められる。

一番の課題は、パニック時に人や車を安全に誘導できるのか。スタジアムが直に幹線道路の歩道に接しており、都市公園の環境としては異常である。

さらにコロナ禍で財政が危機に瀕しているなか、本当に国や自治体から予算が確保できるのか？2017 年の総事業費見込み約 190 億円が約 271 億円に膨らみ、更に膨らむ可能性あり。

② 2 代目平和の鐘、復元整備！

設置当時の円形コンクリート基礎

1949 年 8 月 6 日、第 3 回平和祭で濱井信三市長によって打ち鳴らされた 2 代目平和の鐘の復元整備が概成した。

昭和 50 年代、中央公園の整備に合わせて、鐘楼の下部が 1 m程度埋められていたが、平和の鐘実行委員会と銅合金鋳造会の遺族は、設置当時の姿に復元してほしいと広島市へ要望。市は「ひろしまはなのわ 2020」が終了した昨年 12 月に、会場撤去とあわせて平和の鐘の復元整備に着手。

まず、鐘楼が埋もれている部分を掘削すると、4 本の鉄骨を支える円形の白いコンクリート基礎が見えてきた。少し周辺が欠けてはいるが、初めて見る設置当時の地表部である。

この設置当時の姿で復元されれば、来訪される方に設置当時の状況や人々の思いを共有できると思った。一方で、腐食した鉄骨は大丈夫なのか、大地震に耐えられるかとも考えた。その心配を市へ投げかけ、検討した結果、当時の地表面から 20cm コンクリートを嵩上げし、また鉄鋼内部に 60cm の高さまでコンクリートを充填することになった。

また、この復元整備にあわせて案内説明板を更新。新しい説明板には第３回平和祭の写真を焼き付け、日本文と英文の説明がついている。

復元整備（概成）した姿

現在、鐘楼周辺の円錐型の斜面は芝生の養生中であり、5 月末までに鉄鋼の防錆処置や塔の屋根の欠損部分を修復する予定。6 月初めには２代目平和の鐘の復元整備がすべて完了し、完了後は来訪者が自由に平和の鐘を鳴らせると市から聞いている。（響け！平和の鐘実行委員会・片平　靖）

□ 特別寄稿：トップのジャッジミスを問う～広島サッカー場の建設経緯を振り返る～

広島アイデアコンペ実行委員会　瀧口信二

広島サッカー場の建設事業者の優先交渉権者が決定した。その提案は良く練られており、厳しい敷地条件の中で求められる性能によく応えた創意工夫に敬意を表したい。問題なのは、あの場所にサッカー場が適しているか否かのそもそも論である。

すでに動き出しているので、今さら異を唱えてもせん無い気もするが、敢てこれまでの経過を確認し、この地に建設することに疑問を持つ大勢の中の一人としてここに記しておきたい。

松井市長は 2011 年 4 月に広島市長に初当選して以来、現在 3 期目の丸 10 年の在職となる。官僚出身らしく、そつなく無難に市長の職責を全うされているものと思う。

ただ、中央公園への対応については首をかしげることが多い。旧市民球場跡地の活用については、前秋葉市長が決定していた案を覆す。若者の賑わいの場にしたいという意向で旧市民球場跡地検討会議を開催し、文化芸術施設と緑地広場を整備するイメージ案を取りまとめた。

その後、サッカー場を郊外の西風新都から旧市内に移設しようという機運が盛り上がり、サッカースタジアム検討協議会における検討の結果、広島みなと公園と旧市民球場跡地の 2 候補地に絞り込まれた。

先に球場跡地活用のイメージ案を策定していたにもかかわらず、サッカー場の候補地として認めたことが、市の最初のミスジャッジであった。それ故に、サンフレッチェ広島の久保会長から「球場跡地以外は動かない」という我が物顔の横やりを許すこととなった。

市としては球場跡地に建設する気など毛頭なく、サッカー場の候補地を拒否すべきであった。県が推す広島みなと公園に決まるであろうという甘い読みがあったのであろう。

そして両候補地がつぶれた結果、急浮上したのが中央公園芝生自由広場である。サッカー場の建設地として適当か否かの検討も十分なされないまま、切羽詰まった感じで決めてしまった。

市長としては決断を迫られ致し方なくジャッジせざるを得なかったのであろうが、本当にこれでよかったのであろうか？どんな悪条件でもサッカー場を建設することはできるが、完成した後になって､いろいろな問題が派生しトラブルメーカーになったら､だれが責任をとるのであろう？

市長にはブレインがそろっているはずなのに、だれも止められなかったことにも問題がある。特に建設の担当部局は問題点を充分に把握していたであろうから、苦言を呈してでも止めるべきではなかったか。それができなかったのは、上からの指示がなければ動かない、裏を返せば下からの提案が上がらないという市の組織の硬直化が生じているからであろう。

マスコミにも課題がありそうだ。国政については地元新聞社も思い切った意見を主張しているが、県政や市政になると遠慮がちである。県・市からの情報提供がなければ、書けないことが多いのは理解できるが、この問題に限って言えば市民の声や専門家の意見を聞けばわかることであり、記者自身も疑問を持っている人が多いのではないか。

それなのになぜ記事にしないのか不思議である。市の広報のメッセンジャーボーイに成り下がり、市から報道規制されているのではないかと疑ってしまうほどだ。市民の有志が反対運動を起こして話題になれば取り上げるのであろうが、世論を正しい方向に導くオピニオンリーダーとし

ての気概をもう少し持ってほしい。

私を含めて市民にも問題がありそうだ。身近な出来事にしか興味を示さず、直接自分に関わりのないことには関心を示さない傾向にある。しかし中央公園を利用するのは市民であり、そこにできるサッカー場は市民生活の身近な問題である。

市は反対運動をしている近隣住民だけを相手に一生懸命説得しているが、どんなサッカー場ができて中央公園がどんな姿になるのかを分かりやすく市民全体に説明する義務がある。なぜなら市民の中央公園に市民の税金で造ろうとしているのだから。

松井市長は新サッカー場建設を自分の実績として名前を後世に残したいのかもしれないが、いかに立派な施設ができても敷地の選定を一歩誤ると迷惑施設となり、逆に汚名を残すことになるであろう。

今からでも遅くはない。悔いを残さないためにも、トップは冷静になって未来の広島を見据えた英断をすべきである。ちょうどコロナ禍で世界が停滞し、その対策で国・地方共に財政がますます悪化し、「賑わい・量」から「ゆとり・質」へと生活様式の見直しも求められている。サッカー場の建設は不要不急のことだから、一度立ち止まって計画を見直す最後のチャンスであろう。

以下は個人的見解（＊リンク参照）である。

サッカー場の建設を否定しているわけではない。中央公園のあるべき姿をもう一度見直し、戦後の緊急避難として中央公園から基町住宅団地に割譲した経緯を踏まえ、その役割を終えた段階で基に戻すべきではないか。広島の基（もとい）の地に公営住宅は都市計画上も馴染まない。将来的に基町住宅団地は公園に戻すことを決め、当面は高層アパート群を用途変更することにすれば、サッカー場の適正配置の道も自ずと開かれるのではないか。

□ ほっとコーナー　自然学校から伝える

NPO 法人ひろしま自然学校　花村育海

北広島町の里山のフィールドで自然学校のスタッフをしています。そこには万代池という池があり、池をぐるっと囲む里山が私たちのフィールドです。今回は、私の活動しているフィールドをご紹介します！

ひろしま自然学校は「森を育む」「森で遊ぶ」「人を育む」の３つの柱で活動をしています。

「森を育む」では、下草刈りや間伐、枯れ木処理など里山を整備し、保全しています。また、里山整備をすることで生き物が変化してくるので、動植物の調査もしています。

「森で遊ぶ」では、整備したフィールドで多様な世代に向けた環境教育や自然体験のプログラムを提供しています。幼児の親子向けにイベント型森のようちえんを行ったり、小麦プロジェクトや子どもの長期キャンプを行ったり、大人の自然学校として、自分を見つめ直すリフレッシュキャンプを行ったりしています。中でも、アメリカに本部のある「地球教育研究所」の地球教育のプログラムを日本で唯一行うことのできる施設となっており、地球のしくみを伝える場ともなっています。

「人を育む」では、環境に配慮した暮らしをする人を育んでいくことはもちろん、環境教育や自然体験活動、地域活動で活躍する人材の育成も行っています。子どもたちの体験を支援する大学生、地球教育の１つであるアースキーパーのプログラムを指導するトレーナー、地域づくりのリーダーを担うコミュニティワーカー等、持続可能な社会に向けての人材育成も一つの柱です。

私たちは“環境“というキーワードで活動しています。温暖化や大気汚染、砂漠化等、自然環境にまつわる問題がありますが、その原因は、私たち人間の影響が大きいとされています。ついつい私と自然を切り離して考えてしまいますが、私は“環境”を、私たちの身の回りの“環境”として捉えることが大切だと思っています。しかし私も以前は、環境問題のことが自分の暮らしからかけ離れており、なぜ環境問題が起こっているのか全くもってわかりませんでした。「周りにはこんなにも自然があるのになぜ環境問題が騒がれているのだろう」とさえ思っていました。“環境”という言葉に興味を持ったのは大学生になる時です。そして、大学で様々な人や活動にめぐりあい、自然体験活動や環境教育に出会い、自然学校に出会い、環境への向き合い方を学んだように思います。

今では、自分の身体と心の環境を始め、他者との環境、地域の環境、社会の環境、地球の環境、どれも私を取り巻く“環境”だと思っています。また、環境教育は関係教育とも言われます。私もこの言葉には、感銘を受けました。自然学校で働く上で、自然とのふれあいから自分、他者、社会、地球と向き合う場づくりを大切にしたいと思っています。

○ 広島の復興の軌跡・人物編（第２５回）

～広島復興に対していくつかの問題提起した異色の原爆文学作家　大田洋子さん～

はじめに

今回も現実の復興計画・事業そのものに関わったのではないが、重要な影響や関係を有した人物を取り上げることとする。その人物とは大田洋子さんである。実は今、基町中央公園において大田洋子文学碑移転をめぐって動きがあるが、本稿はそのこととは無関係の、広島復興過程でのエピソードである。

時代は前後するが、まず大田洋子の著書「夕凪の街と人と」における間接的な広島復興への強烈なコメントを紹介しよう。そしてもう一つ、復興計画を策定する直前に行われた重大な会議で、招待されていた大田洋子さんの発言である。時代考証の詳細は省くが、その内容を深く受け止めてほしい。（以下敬称略）

１．基町相生通り（通称原爆スラム）を通しての百メートル道路建設批判

大田洋子は広島県で生まれたとされるが、幼いころ広島から出て波乱に満ちた人生を送り、その中で作家としてデビューし、戦時下では銃後作家、国策作家としても登場し、一定の評価を確立していた。ところが戦時末期広島市白島の近親者の家に疎開して被爆し、悲惨な体験をしている。この体験が原爆文学における原点となり、「屍の街」「半人間」などのいくつかの作品に結実している。

そういった中で戦後の広島を描いた作品「夕凪の街と人と」において 1953 年の実態として、基町相生通り（後に原爆スラムとも呼ばれた）での記述を残している。そこで被爆者の人たちとも関わりながら当時の復興事業、建設中の百メートル道路に対して、

> *なんの用があって作ったかしりませんが、あの広い幅をもった、百メートル道路を見てごらんなさい。昼なお暗いほど、雑草にうずもれて、人通りもろくにありはしません。*
>
> *お前らは無断建設したんだから、どこへでもゆけという、ここは公園にするからどいてくれと言って追いはらったんですからね。市民がくるしんどるのに、道にばかり草花を植え、花壇にしてみたところで、世界の遊園地にしてみたところで、市民の方でそれを愛していませんから、草も花も、木も育ちはしません。*
>
> 「夕凪の街と人と」より

と、痛烈に批判したのである。この時、引き合いに出されているのが、無断建設した場所こそ相生通りであったから、対比的に百メートル道路への明確なメッセージとなった。

再刊された『夕凪の街と人と』（三一書房）のあとがきにおいて刊行委員会は、相生通りについて「*この地は大田洋子の『夕凪の街と人と』の舞台となったところです。大田洋子は一九五三年の八月の終わり、妹さんの中川一枝さんの戦災者住宅を訪れ、崩壊の街を取材します。そして貧しい被爆者や戦災者、朝鮮人など、政治からも社会からも見棄てられた救いのない底辺の生きざまを、まるごと描きました。*」と紹介したのである。

２．復興計画座談会での河岸緑地推奨の発言

もうひとつ、対照的で明確な発言がある。それは 1946 年 2 月 22 日に当時の楠瀬常猪県知事招集で開催された「広島市復興座談会」における大田洋子提案で、

> *ヴェネチアは水で栄えたが、広島は水で悩まされた。広島の今後の発展に、川は大きな問題となってゐる（ママ）。旧広島は川すぐ傍に道路があったが、あれはいけない。川べりはすべて緑地帯として公園をつくるべきだ。市の周辺にアパートを多くつくり戦災者にはやくバラックの生活をやめさせたい。*

と、当時の新聞（同年 2 月 24 日付中国新聞）に掲載された。新聞報道では、詳細は不明であるが、川べりに緑地帯をつくれと主張していることには疑いない。まさに後の河岸緑地の計画思想である。それは驚くべきことに実現したのである。それまで河岸に沿って民家や商家、倉庫、旅館や割烹など存在していた。すなわち、かつては河岸に沿って一皮、多くの場合民有地で、そこは河岸のメリットを享受する施設が立地していたのである。それが被爆したとはいえ、戦後、その主要部を公有地に変換し、緑地にしようという提案であった。もちろん所有権を抹殺するのではなく、土地区画整理という権利変換の手法で実現につながっていくが、それまでの環境が一変するのであるから大きな犠牲を強いたことは確かであろう。

実現の過程は大田の意図通りであたかどうか、いや 1946 年での提案をそのまま主張し続けていたかどうかも不明であるが、当初の発言は歴史的な事実として記憶されるであろう。

３．復興計画・事業への評価と時代変化

今回は復興計画における直接の関係者でなく、その周辺での発言者・評価者という立場の人が対象である。これによって復興計画のある側面が照射されるであろう。

以上は矛盾するような二つの大田提案・発言であるが、それぞれを時代の制約とか言って片付けるのは間違いであろう。ともに当時精一杯の生き様をぶつけた結果であり、もしかしたら一貫した理念があるのかもしれないし、それぞれ重大な結果をもたらしたといえる。大田提案が河岸緑地計画実現に直結したわけではないであろうが、現実の計画に道筋をつけたことは確かであろう。百メール道路批判は 1955 年における市長選で渡辺忠雄候補に有利に働いたであろう。

原爆文学の作家として著名な大田を、復興計画の側面からとやかくいうべきではないかもしれないが、復興過程でちらっと見せた大田の姿を記憶していただきたく、筆を執ったのである。

（編集委員　石丸紀興）

【大田洋子の略歴】1903 年広島市生まれ、両親の離婚に伴い複雑な幼少期を過ごした後、上京して雑誌や新聞社の懸賞小説に入選して作家の地歩を確立し、広島で被爆してプレスコードも経て、独特の視点で文筆を進め多くの作品を残した。1963 年没、60 歳。出典：中国新聞社編「広島県大百科事典」、写真も。

○「時代を語り建築を語る会（第３０回）」報告

語り人：池田正彦氏（広島文学資料保全の会事務局長）

テーマ：大田洋子文学碑受難～移転計画の杜撰さを問う～

略歴：1946 年生まれ。広島平和教育研究所を経て、1985 年に広島文学資料保全の会が結成され、事務局長に就く。

新サッカー場の建設に伴い移転を求められた大田洋子文学碑をベースに、中央公園の動きや原爆文学などについて意見交換がなされた。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2021 年 3 月 28 日（日）16:00～18:00

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

☆　大田洋子文学碑の建立の経緯

大田洋子は「屍の街」「夕凪の街と人と」「半人間」など原爆を主題とした作品を多く残すが、広島においては知名度が低い。

文学碑は、大田洋子を高く評価した詩人の栗原貞子が呼びかけて、詩画人の四國五郎の設計で 1978 年に建立。場所は「夕凪の街と人と」のゆかりの地、原爆スラムがあった中央公園の川側に設置。

大田洋子文学碑

☆　市から移転の事前相談なし

昨年、サッカー場の計画地を中央公園の東側から西側に移し、西側にある中国庭園や大田洋子文学碑、他の移転方針を一方的に決定したことを新聞で知り、びっくり。すぐ市の担当課に申し入れ、文学碑の建立経緯と存続意義について説明し、移転先への配慮を要請。

☆　埋蔵文化財発掘調査及びサッカー場の建設に対して

現在は文学碑と周囲の石組みが撤去され、建設地は仮囲いをして発掘調査中。東側に城門跡など重要な遺構があるため急遽西側に配置換えしたと聞くが、西側に遺構はないのか？

江戸時代の武家屋敷、明治以降の陸軍施設、戦後の復興住宅など、まちの歴史の重層的な考察をするためには慎重な調査が必要と思うが、サッカー場建設最優先で進められている。発掘調査は公開して内容を公表すべきなのに秘密裏に行われている。

サッカー場の建設そのものに反対するつもりはないが、どんな風に進めようとしているのかもっとオープンにすべきであり、市民を置き去りにして市が勝手に進めている。

☆　原爆文学館の要望

大田洋子以外にも「夏の花」の原民喜、「原爆詩集」の峠三吉、「生ましめんかな」の栗原貞子など、原爆の惨禍をテーマに多くの文学作品が残されており、資料を保全するためにも文学館が必要。平和運動と原爆文学を連動させ、ユネスコの記憶遺産登録を目指す。

☆　会場より意見など

・まちの歴史を重層的にとらえ、観光は点でなく、ゆかりの地のネットワークを図るべき。
・市民運動の課題として、市民の要望をうまく受け止めて市を動かす仕組みづくりが必要。
・広島市生まれ育ちで平和学習を受けたにもかかわらず、大田洋子について初めて知った。
　平和学習に原爆文学を組み込んで欲しいし、文学館ができれば、社会人になっても学べる。
・物語を作って、原爆文学に関わりのある人や場所を巡る文学散歩地図を作ってはどうか。

○「Hihukusho ラジオ（第１６回）2021.2.15（＊リンク参照）」報告

昨年の６月より月２回、１時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「Hihukusho ラジオ（＊リンク参照）」がインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人たちが登場している。今号は第 16 回目の平岡敬氏の発言の要点を紹介する。

ナビゲーター　：土屋時子（広島文学資料保存の会代表）
ゲスト　　：平岡　敬（元広島市長）
インタビュアー：瀬戸麻由（シンガーソングライター）

―市長になるまでの略歴―

広島県出身の両親が大阪で結婚し、自分は 1927 年の大阪生まれ。父親の仕事の関係で小学 3 年生の時に朝鮮へ移住したが、学校の都合で広島の叔母に預けられて本川小学校 5・6 年生を過ごし、また朝鮮に戻る。京城（現ソウル）の中学校と大学予科に進み、学徒動員で派遣された北朝鮮の工場で 1945 年の敗戦を迎え、家族と共に広島に帰る。

旧制広島高等学校、早稲田大学を卒業し、1952 年に中国新聞社に就職。中国放送の社長の時に市長選に担がれ、1991 年から 2 期、1999 年まで市長を務める。

―市長になって目指したこと―

生きていることに喜びが実感できる安心で暮らしやすい街を目指し、まずは生活基盤となる都市のライフラインの整備、特に下水道の普及に力を注ぐ。

広島のアイデンティティを発揮できるのは 8 月 6 日の平和宣言である。1994 年に広島でアジア大会が開かれることもあり、1991 年の平和宣言で初めてアジアの国に対して加害者としての謝罪を行う。それまでは欧米の国々に対する被害者の訴えに終わっていた。

1995 年に国際司法裁判所で核の使用は国際法に違反すると陳述したことも印象深い。日本政府は今でも違反ではないと主張しており、核兵器禁止条約にも背を向けている。

―被爆 50 周年記念事業―

1995 年の被爆 50 周年記念事業の一つとして被爆者療養施設の神田山荘に温泉を掘り、被爆者には無料で利用してもらっている。

被爆 100 年のまちづくりを目指した「ひろしま２０４５ピース＆クリエイト事業」は、市の公共建築の設計者に著名な建築家を選定して、矢野南小学校、基町高等学校、西消防署、中清掃工場などデザインの優れた建築を作り出した。財政上の問題もあるだろうが、続けて欲しい。

―被爆建物との関わり―

原爆ドームはすでに保存が決まっており、市長時代には世界遺産に努力した。原爆ドームは 1960 年に白血病で亡くなった高校生の楮山ヒロ子さんが保存を呼びかけたのをきっかけに市民が共鳴して保存運動が拡がった。浜井信三市長も最初は解体論に傾いていたが、市民の熱意に押されて保存派になり、保存のための募金集めでは率先して街頭に立った。

被爆建物も多く残っていたが、まちの発展と共に姿を消していく。主要な被爆建物は外壁の一部などを保存しながら建て替えられるケースもある。

まちづくりは都市の歴史を受け継いでいくことが大事。被服支廠は被爆建物であると共に軍都としての負の遺産でもある。

―軍都廣島の歴史―

広島は明治 27～28 年の日清戦争を契機に、明治天皇を迎えて帝国議会が開かれ、大本営も移される。宇品線が敷かれて宇品港から兵隊を大陸に送り込み、大陸進出の基地となる。

その後、宇品線沿いに兵器支廠と被服支廠が配置され、宇品の糧秣支廠がそろい軍都の骨格が整う。今は兵器支廠は無くなり、糧秣支廠は一部を残して市の郷土資料館となり、被服支廠はどうするか目下検討中である。

陸軍桟橋跡記念歌碑
（広島県公式観光サイトより）

本川小学校 5 年生の秋ごろ、先生に連れられて芸備銀行（現広島銀行）本店前に並び、大陸に出征する兵士を見送った記憶がある。市民も動員されて大勢で見送った。前年の 1937 年に日中戦争が始まり、大陸に兵士を送り込んだ時期である。広島城内の第 5 師団の西練兵場から鯉城通りを通っ

て鷹野橋、御幸橋、宇品へ行進し、そして陸軍桟橋から出征した。
　市長時代に市民有志からの陳情を受けて、戦後の日本歌壇をけん引した近藤芳美氏（広島市出身）の陸軍桟橋跡記念歌碑を宇品波止場公園に建立。
　碑文『陸軍桟橋と　ここを呼ばれて　還らぬ死に　兵ら発ちにき　記憶をば継げ　芳美』
　近藤氏は宇品から中国に出征し、病気のため帰還した。被服支廠を思う時、宇品の陸軍桟橋を歌ったこの短歌が思い浮かぶ。

―当時の人々の戦争のイメージ―

　自分が子供の頃は戦争していても外地のことであり、勝った！勝った！という都合の良い情報しか入ってこないので、戦争の実感はなかった。1944 年のサイパン島陥落以降、戦況が厳しくなり空襲が始まったが、「今に神風が吹いて勝つぞ！」という神話を吹き込まれ、子供はみんな信じていた。
　出征した人には戦場体験があり、自分より若い世代は疎開体験、自分の世代は学徒動員、広島・長崎では原爆、東京などの都市では空襲、外地からの引き揚げ体験など、人それぞれに戦争の体験や思いは異なる。
　敗戦により外地にいる自分達が命からがら引き揚げて感じたことは、いざという時に国家は当てにならないという思いである。軍隊が守ってくれるものと信じていたのに、敗戦と共に放り出されてしまった。国家とは何かという疑問は今でも抱いている。

―被服支廠との出会い―

　市長時代、段原再開発で新規道路を計画する時期に被服支廠の存在に注目し、市の若手職員たちと学園や音楽ホールなどの活用を議論した覚えがある。活用する場合、隣接道路が狭いので新規道路との間の民家に立ち退いてもらう必要があるという意見も出たが、被服支廠の所有が県と国なので、話だけに終わる。

―被服支廠の保存活用の動きについて―

　全棟保存した方が良いと思う。被服支廠は軍の文化が広島にあったことの証である。日常の中に記憶が薄れがちになるが、原爆ドームを見ると原爆の悲劇が蘇るし、被服支廠を見ると原爆悲劇だけでなく、戦争加害の歴史を思い出す。記憶を継承できるのが遺構の役割であり、被害と加害の両面から見なければ、戦争の全体像をとらえることができない。
　保存活用の費用がネックとなっているが、戦闘機 1 機分あれば充分。軍備費の拡大を考えれば、大したことではない。核の時代に軍事力で国を守ろうという考え方はもはや古い。

―核時代の平和の構築―

　日本はこれから人口が減り、高齢化が進む。資源や食料も輸入に頼らざるを得ないし、海岸には 52 基の原子力発電所が並び、戦争できない国である。核兵器を使わなくても原子力発電所が攻撃されれば、壊滅的な被害を被るし、戦争しなくても核が存在する限り、いつ事故などが発生して爆発するかわからない。
　戦争できない国が生き残るためには、核武装や軍備を強化することではなく、今の貧弱な外交力を強めて、話し合いにより平和な環境を作っていく道しかない。そしてどの国とも仲良くすることである。
　核兵器を使えばどうなるかは広島が体験して学んでおり、絶対に戦争をしてはいけない。核兵器禁止条約が発効したのだから、それをテコにしてアジアに非核地帯を広げていけば、核兵器の脅威から逃れることができる。

―広島から平和思想を―

　核の被害は広島だけでなく世界中に核被害者、戦争被害者がいるという視点も大事。広島は核廃絶と世界平和を訴えるだけでなく、地球上の核被害者の訴えを受け止めてヒロシマの平和思想を鍛え直し、再び広島から世界へ打ち返すことが必要。核兵器が無くなった後の世界の姿を描いていかなければいけない。
　世界には核の問題以外にも貧困、差別、内戦、難民、病気、ドラッグ、暴力などの難問を抱えており、広島の被爆体験を原点としてそれらの問題解決に取り組み、平和の思想を構築していかなければいけない。

コメント

　93 歳にして健在な論客であり、戦後の苦難を生き抜いた覚悟がうかがえる。最後 10 分の広島からの平和思想は熱がこもっている。　　（編集委員　瀧口信二）

○「基町プロジェクト」より

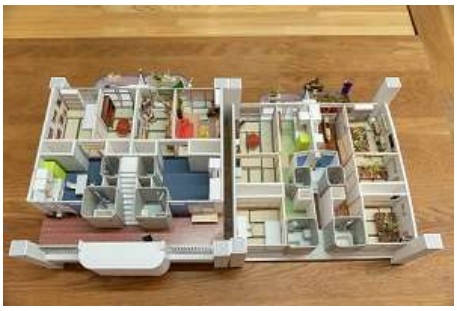
基町資料室について

広島市立大学社会連携センター非常勤特任教員
基町プロジェクトスタッフ　片島　蘭

＊基町資料室：はじめて基町を訪れる方に

基町資料室は、基町アパートに興味があるけど、どこに行けばよいかわからないという方や、基町に関心のある方と交流をしたいという方のためのビジターセンターです。2020 年 10 月にオープンしました。

基町エリアは、城下町から軍事都市、そして平和都市へと移り変わった広島の歴史と密接に関わっている地域です。戦後、住宅営団や県市が旧陸軍用地に作った応急住宅の街は、現在では約 3,000 戸全てが市営住宅の団地になりました。その街の変遷を、地域内外から集めた当時の写真、地図などの資料で振り返ります。また、基町アパートの建築模型（全体模型 1/300、住居模型 1/30）を通じて、建築家大髙正人による人工地盤を取り入れたメタボリズム建築の魅力を学ぶことができます。



住居模型

ご来場の際には、まず最初に M98 のスタッフへお声がけ下さい。スタッフが資料室を解錠してご案内いたします。

＊基町プロジェクト活動拠点 M98：アートとデザインで地域をより魅力的にアップデート

M98 は、基町アパートの中央商店会の一角で、広島市立大学と広島市中区役所が、デザインとアートで地域の魅力づくりなどに取り組む基町プロジェクトの中心的活動拠点です。分かりづらかった商店街のフロアマップをリデザインしたり、地域の方から昔の写真を募集して写真展を企画したり、学生が空き店舗を改修してギャラリーを作り作品展示を行ったりしています。

普段なかなか行く機会のない基町アパートですが、まちづくりやデザイン・建築・アートに興味がある方におすすめです。基町に関する資料もいろいろあります。

＊Unité(ユニテ)：実験的ポップアップショップ

小さなスペースで作品展示をしてみたい。自分で作った作品を販売してみたい。少人数のイベントを企画したい。Unité（ユニテ）は、そんな若者や学生に体験の場を提供します。

２面が白い壁で、現状回復を条件に釘なども自由に打てます。ガラス張りの空間は、通りからも中の様子がよく見えて開放的です。小さなバックヤード、シンク、トイレが完備されており、物販利用の場合も含めて、利用料は無料です。原則として、広島市立大学生と卒業生の利用を目的として運営しています。

ご利用のお問い合わせは、専用ウェブサイトか、基町プロジェクトのスタッフに直接お問合せください。基町プロジェクトでは、地域で若い人がいろいろなことに挑戦する機会が増えることが、地域の魅力を高めることに繋がると考えています。

＊モトマチ・アートウィンドウ：年間を通じて様々な作品展示をする基町の窓

基町ショッピングセンター南側にある、高さ約 2 メートル、幅が一辺約 8 メートルの大型のショーウィンドウをリニューアルし、2015 年から活用を開始しました。もともとはショッピングセンターのお店を広告するための場所でしたが、近年では長らく使われていませんでした。現在は基町に関連のある作品や、基町プロジェクトの活動紹介を展示しています。

（注）「HIROSHIMA ART Scene」に書いた原稿の再録

私達は、基町地区でこのような活動を行っております。

毎週水曜日から日曜日 12：00～17：00 にオープンしていますので、どなたでもお気軽にお越しください！〒730-0011 広島県広島市中区基町 16-17-2-103（基町郵便局２つ隣）

＊基町プロジェクトの趣旨についてはメルマガ 43 号の巻頭言で中村圭准教授が紹介されていますので、こちらからご覧下さい。http://machizukurihiroshima.web.fc2.com/kantougen/kantougen43.pdf

□ 編集後記

精一杯頑張っている

コロナ禍は、いっこうに衰えず、緊急事態宣言や蔓延防止法も期待したほどの効果を上げてこない。この間、ニュースや新聞による報道は、世界の感染の拡大に対する恐怖を流し、国内の感染拡大に向かう国・県・市区町村の判断ミスと対策の遅れを報道し、国民にはより一層の自粛を求めるばかりである。

ニュース番組に登場する学識者や医療関係者の多くは、感染判断目標を国民に詳しく説明すること以外に、共感を得て、より厳しい自粛に向かう方法は無いと言う。

私は１年ぶりに馴染みの居酒屋へ立ち寄った。お店の換気、玄関での手の消毒、客席の距離の確保と界壁の設置など、できる限りの設えで迎えてくれた。席はみるみる満席となり、冷静沈着な雰囲気の中でコロナ以前の賑わいを取り戻していった。

市民が精一杯頑張っているのだから、国・県・市町村のリーダーの皆さん、今は、わき目も振らず重症化率や蔓延率が高いと言われる変異株コロナの収束に邁進してください。

（編集委員　前岡智之）

＊メルマガを読まれての感想や質問及び広島のまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
髙東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表